

の表示針の非

眼で見るよりも
時を感じる

奥山栄一:写真
Photographs by Eiichi Okuyama
鈴木幸也(本誌):取材・文
Text by Yukiya Suzuki (Chronos-Japan)

時計は針で時刻を表示するもの。生まれてこの方、「針のある」時計を見慣れてきた我々の脳裡には、いつの間にかそれが当然のこととして刷り込まれている。確かに、80年代のデジタルウォッチブーム以降、デジタル表示は馴染み深い存在となった。それでもやはり、時計といえば、置き時計から腕時計、そして街角

や駅のプラットフォームの時計に至るまで、機械式時計かクォーツウォッチかを問わず、その主流は指針表示である。その「常識」に対するアンチテーゼだろうか？ 今年、機械式時計であっても、時刻表示を針に拠らない時計が目につく。それも、見慣れたディスクによるデジタル表示ではなく、チェーンや

ベルト、そしてシリンダーを用いた多様な機構だ。ここに来て、「針のない」独創的な刻時表現が開花したのは単なる偶然だろうか？ その真相を探るべく、我々はスイスへと旅立った。そこで目にしたのは、形而上の概念から解放された、自由な時計が刻む、再構築された「時の具象」であった。



形而下学

右/アジェノのオーナー、ジャン・マルク・ヴィダレッシュ氏。1989年以降、ハリー・ウィンストンのパートナーとして同社の代表モデルを手掛ける。「オーパス9」の製造を担う。左/フリーのプロダクトデザイナー、エリック・ジルー氏。「オーパス9」のデザインを担当。代表作の「トゥールビヨン・グリシエール」に見られるように、建築家としての経歴が意匠に生かされている。

HARRY

WINSTON



点から線、 そして環への 軽やかなる昇華

「時の表示革命」。「オーパス」シリーズを定点観測してきた眼には、近年、その先鋭化と洗練度が著しく映る。「オーパス3」を皮切りに、「オーパス5」以降は、いずれも指針表示を採用していない。その系譜の中でも、もっとも優美な「非針表示」といえるのが、この「オーパス9」だ。ふたりの俊英のハリー・ウィンストンへの「オマージュ」が、点の輝きを環へと昇華させたのだ。

実

は、「オーパス9」の開発期間は想像以上に短いものであった。ハリー・ウィンストンから、オ

ーパス9製造の依頼があったのは2008年6月23日のこと。その依頼を受けたのは、レトログラードなどの優れたモジュールワークで知られるアジェノのオーナーであり、時計師でもあるジャン・マルク・ヴィダレッシュ氏だ。彼には3年前から温めていたあるコンセプトがあった。

「それは、ひとつの石で時を表示する時計です。ダイヤモンドの文字盤の中で、宝石がひとつだけ動いて時刻を表示するというものです」

ヴィダレッシュ氏はすぐさま、かつてそのコンセプトを共有したフリーのデザイナー1、エリック・ジルー氏に電話をかけた。

「3年前のアイデアをもう一度考えてみてくれないか？」

その時、ジルー氏はバカンスに出かける

ちょうど1週間前であった。ジルー氏が描いた初期のデザイン画を見ると、2008年7月8日と記されている。

「まさに、バカンス中のプロジェクトでした。日頃のルーティンから解放されていたせいか、朝夕30分くらい、1日1枚のペーシングでデザイン画を描きました。若いときにはやりたいことが多すぎて、常にいろいろなことを考えていましたが、今は1日中ひたすらそのことを考えていられるので、短時間でも充実してデザインできるようになりました。オーパス9は、当初からコンセプトが明確だったので、デザインは最初からそれほど大きく変わっていません」

ヴィダレッシュ氏は、3年前のコンセプトをもとに、ふたつのチェーンを使って、時刻を表示するところまでアイデアを進展させ、それを最初の電話でジルー氏に伝えていた。ジルー氏もすぐに同意したという。「ハリー・ウィンストンなら、やはりダイヤモンドじゃないか？」と。

今を遡ること3年、当時はダイヤモンドをチェーンにつないで、それを高い精度で動かし、時刻表示に応用するには加工技術が充分ではなかった。そのために頓挫していたアイデアが、ハリー・ウィンストンの依頼から、わずか1年足らずで実現したのだ。その裏には、ひとつひとつのダイヤモンドに備えられた、それを動かすための微細な「歯」を精密に加工できるようにした工作機械の著しい進歩があった。

ヴィダレッシュ氏は言う。「私はあくまで時計師です。現在は、ひとつの会社ですべてを作ろうとする傾向がありますが、私の場合は、それぞれの分野の最高の人材と協力して時計を作るのがモットーです」。そ



“Opus 9”

ハリー・ウィンストン「オーパス9」

「光の遊び」を意識した意匠は、ブリッジを中央に、その両側に時と分を表示する2本のチェーンを配して「密」を、サファイアチェーンが外装を構成する外側に向かって「空」を表現。100本限定生産。自動巻き。パワーリザーブ約72時間。18KWG（縦48×横56mm、厚さ20mm）。3気圧防水。予価2205万円。

HARRY WINSTON

300MAJEWV 043205 PROTO 5/5

750

A project developed with

Jean-Marc Wiederrecht
&
Eric Giroud



アジェノーにおいて組み立て中の「オーパス9」。ふたつのダイヤモンドチェーンが土台にセットされている。チェーンシステムを駆動するためには6つのセラミック製ベアリングが使用される。上にはベースとなるフレデリック・ピゲ Cal.1153が見える。ダブルバレルでパワーリザーブ約100時間の Cal.1151の振動数を毎秒6振動から8振動に上げ、パワーリザーブを約72時間に下げること、精度を高めたのが Cal.1153である。

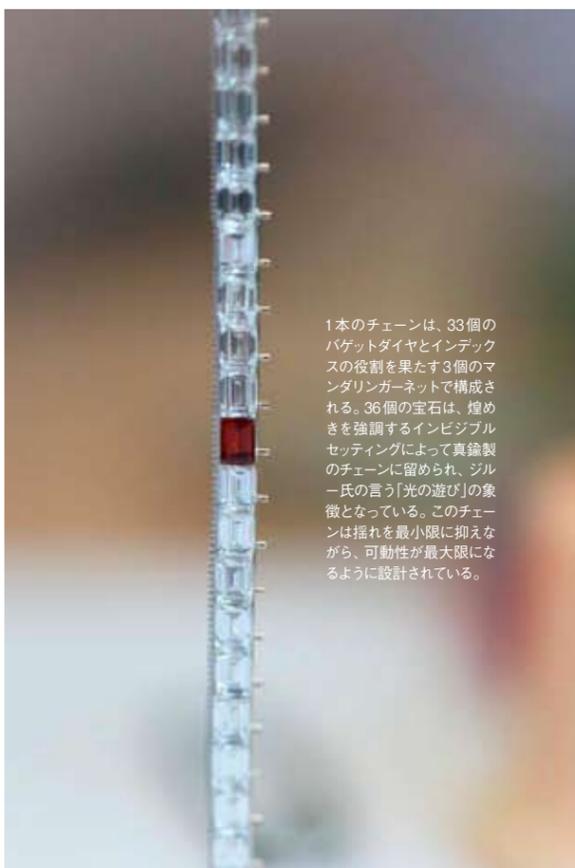


右/ブリッジの両側に配された、厚さ1.2mmの2本のサファイアチューブが外装を構成する。中/チェーンシステムの仕組みを示すCG。それぞれの宝石には精密な7つの「歯」が備え付けられ、それをベースムーブメントに繋がるギアが駆動する。左/チェーンを回転させる土台となる洋銀製のパーツ。摩擦に対抗するため、表面にはテフロン加工が施されている。

の言葉通り、オーパス9には各分野の才能が集結している。ベースムーブメントには、1980年代から20年以上にわたって高級時計ブランドに採用され、高い評価と信頼を得ているフレデリック・ピゲのキャリバー1153を選んだ。オーパス9の核心技术であるチェーンを構成するダイヤモンドに備え付けられた7つの「歯」は、優れた加工技術を持つトレリアニ社に依頼した。従業員こそ20人足らずだが、最新鋭の CNCマシンを15台も所有する、アジェノーにほど近い歯車製造会社だ。

また、オーパス9の美しいだけでなく、寸分の隙もないプロファイルを生み出すサファイアチューブの外装にも、外部の高度な技術が注ぎ込まれている。だが、その製造は困難を極めたという。最初はスイスのメーカーに依頼したが、どうしても望むものができなかった。彼らはふたつのパーツを合わせることでしか、筒状のサファイアガラスケースを製造できなかった。次にロシアの会社を当たったが同様であった。最後に依頼したのが、ガラスの精密加工を得意とする日本のメーカーであった。早速、デザイン画を送ったところ、指定した納期と金額通りに、一体成形されたサファイアチューブが出来上がった。

このように優れたパートナーと組んで時計を作る手法は、かつてハリー・ウィンストンに在籍したマキシミアン・ブッサールから学んだとふたりの俊英は明かした。オーパス9は、中央のブリッジを土台にしている。多くの時計は針が中心にあるが、オーパス9はブリッジが中央にある。これが、意匠だけでなく、耐衝撃性を高める構造的な役割も果たしているのだ。いかにも建築家でもあるジル・ルー氏らしい発想だ。彼は言う。「なぜオーパス9を作ったのか？何よりチェーンのアイデアが素晴らしい。しかも、ハリー・ウィンストンというブランドに対するオマージュとして秀逸だと考えたからです。実は、ブランドに対するこのオマージュが、デザインするうえで非常に大切なのです」。すなわち、ひと目見て、



1本のチェーンは、33個のバゲットダイヤとインデックスの役割を果たす3個のマンドリンガーネットで構成される。36個の宝石は、煌めきを強調するインビジブルセッティングによって真鍮製のチェーンに留められ、ジルルー氏の言う「光の遊び」の象徴となっている。このチェーンは揺れを最小限に抑えながら、可動性が最大限になるように設計されている。

ブランドとそのブランドが持つ文化を認識させることがデザインの重要な点だ。ハリー・ウィンストンにとって、それはダイヤモンドに他ならない。

「オーパスのようなものを作るのは、実はキャリアにおいて大変なこと。なぜなら、作るうと思ってもそう簡単に作れるものではないから。だからこそ、あえて私はこの仕事を受けたのです。これまでとまったく違うものをデザインするために」

「オーパス9はレトログラードの行き着いたところだ」とヴィタレッシェ氏は言う。一般的なレトログラード表示は、扇形の末端に至ると、もう一方の端に隣時に戻る。ふたつの点と点を反復する動作を指針が担っているのだが、その末端と末端を結んで環にしたのが、このオーパス9である。89年、彼がハリー・ウィンストンのために手掛けた同社初のレトログラードは、曜日と日付のふたつのレトログラード表示を備えていた。その20年後、かつて平面上にあった点と点を結ぶ往復運動は、時刻を3次元で表示するふたつの環の回転運動へと昇華されたのだ。

「始め」と「終わり」を示すふたつの点を文字盤上で途切れることなく表現したい。それは、言わば「永遠」を表現しようとする試みであり、デザインと技術の融合点でもある。デザインをジルルー氏、技術をヴィタレッシェ氏が担い、彼らがハリー・ウィンストンへのオマージュとして、そのブランド文化をダイヤモンドの輝きによって現出した。しかも、かつて誰もできなかった手法で、それこそが「オーパス9」の極みなのだ。